

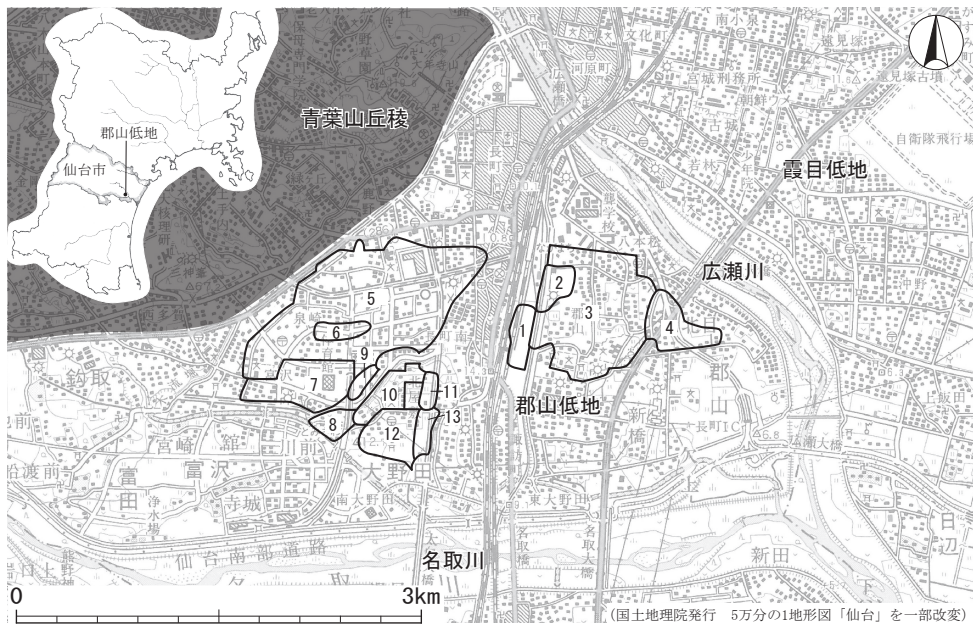
研究ノート

# 長町駅東・西台畑遺跡における弥生中期の剥片剥離技術

鶴久森 彬

## はじめに

名取川下流では、広瀬川が合流し、三角形の低地（以下、郡山低地と呼ぶ）を形成している。この郡山低地では、旧石器時代から継続的に人類の活動がみられるが、稲作が開始される弥生時代を契機に遺跡数が増加し、特に弥生中期の水田跡が各遺跡で検出されている。遺跡の分布は、郡山低地の中でも長町駅を挟んで東側と西側に遺跡の分布が分かれている（第1図・第1表）。郡山低地東側の長町駅東遺跡では、弥生中期の集落・生産域・墓域がセットで検出されており、県内でも有数の遺跡として挙げられる。また、隣接する西台畑遺跡からは墓域が検出されている。両遺跡から出土した遺物には、弥生中期前葉から中期中葉までの土器<sup>\*1</sup>の他、石器が多く出土している。これらの石器には接合資料がみられ、剥片剥離技術を知る上でも良好な資料と言える。



第1図 郡山低地の弥生遺跡分布図

No.	遺跡名	立地	種別	時代	備考
1	長町駅東遺跡	自然堤防	集落・水田跡・墓域	弥生中	竪穴住居跡1軒、性格不明遺構3基(住居跡か?)、土器埋設遺構7基、土壇墓2基
2	西台畑遺跡	自然堤防	墓域	弥生中	土器埋設遺構7基、土壇墓2基
3	郡山遺跡	自然堤防	水田跡	弥生中	
4	北目城跡	自然堤防	水田跡	弥生中・後	
5	富沢遺跡	後背湿地	水田跡	弥生中・後	
6	泉崎浦遺跡	微高地上・自然堤防	水田跡	弥生中・後	
7	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	水田跡	弥生中・後	
8	下ノ内遺跡	自然堤防	散布地	弥生後	
9	下ノ内浦遺跡	自然堤防	墓域・水田跡	弥生中・後	竪穴遺構1基、土壇墓1基、土器棺墓3基
10	六反田遺跡	自然堤防	散布地	弥生中・後	
11	大野田遺跡	自然堤防	散布地	弥生	
12	大野田古墳群	自然堤防	散布地	弥生	
13	王ノ壇遺跡	自然堤防	散布地	弥生	

第1表 郡山低地の弥生遺跡

郡山低地における弥生時代の石器は、まとめて出土する例が少ない。郡山低地周辺の遺跡で、比較的まとめて石器が出土している事例としては、霞目低地の中在家南遺跡、高田B遺跡が挙げられる。両遺跡では、これまで製品の製作工程・形態・機能に関する研究が行われてきた(斎野2002、荒井2003、仙台市教委1996・2000)。一方で、剥片剥離技術については、資料的制約もあり、石核から剥離工程を推測するのに留まっている。

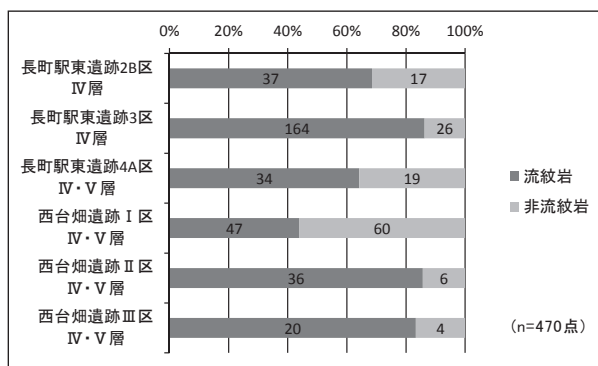
本稿では、弥生中期の比較的一括性の高い遺物が出土している長町駅東遺跡と西台畑遺跡を対象とし、石材の利用傾向、剥片及び接合資料の検討から当該期の剥片剥離技術を明らかにしたい。

## 1、石材の利用傾向

石材の利用傾向を見出すために、石器組成の検討を行った(第2図)。対象としたのは、弥生中期の包含層IV～V層中の剥片石器470点である<sup>※2</sup>。

第2図から読み取れるように、長町駅東遺跡、西台畑遺跡共に、流紋岩が主要石材となっている。主要石材の流紋岩を補完する非流紋岩の石材としては、珪化凝灰岩、凝灰質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩、碧玉(鉄石英)、玉髓(瑪瑙)がある。

流紋岩は広瀬川・名取川の河床で豊富に見られる石材である（山田 1986、須田 2004）。須田の研究によると、広瀬川の流紋岩は石英斑晶が大きく、名取川の流紋岩は黒雲母が含まれるとされており、両遺跡においても、それぞれの特徴を持った流紋岩製の石器が確認できた。珪化凝灰岩、凝灰質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩も両河川で採取することが可能であるが、良質な珪質頁岩、黒色頁岩は、山形・宮城県境一帯で採取されたものと考えられる<sup>※3</sup>。碧玉は拳より小さいものが広瀬川で僅かに採取できるようだが、両遺跡から出土したものの中には、拳大程度の礫が使われているものが含まれることから、遠隔地から供給されたものと考えられる。碧玉、玉髄はいずれも遠隔地からの供給と考えられるが、産地が複数ヶ所存在するため、どこの産地から供給されているかは不明である<sup>※4</sup>



第2図 石材組成

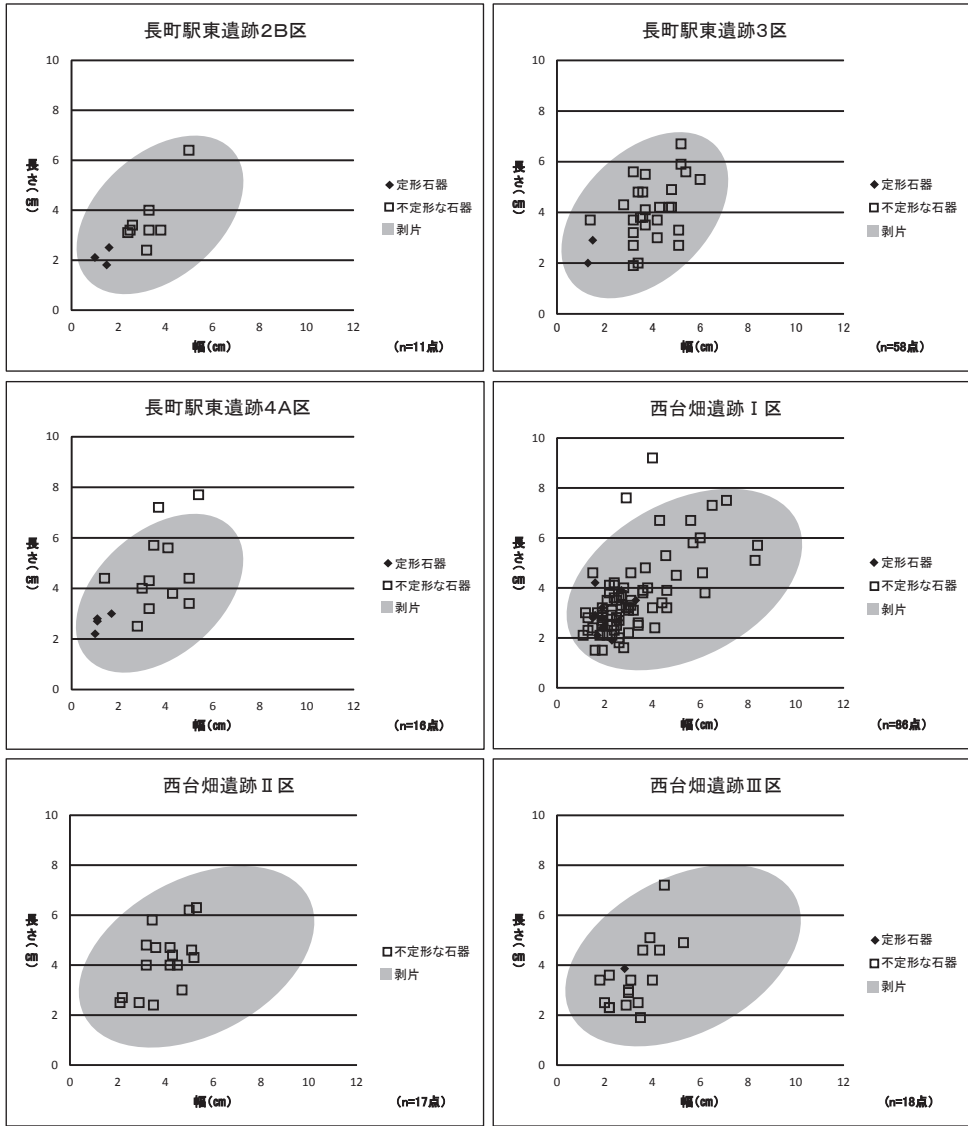
## 2. 剥片について

### 2-1 剥片の大きさと石器との関係

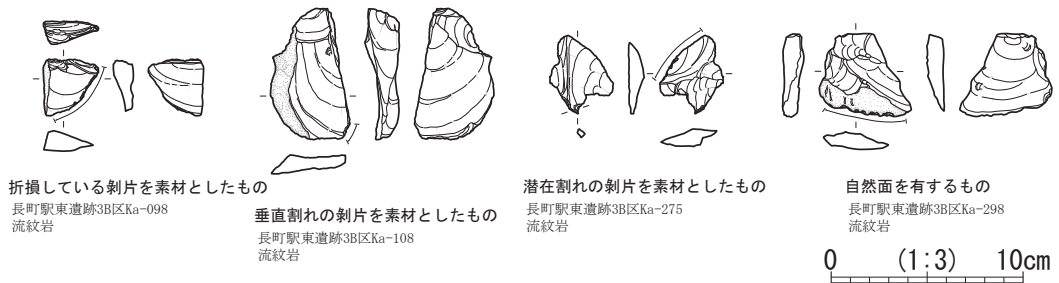
完形剥片の大きさと石器との関係を見出すために、長幅相関図による検討を行った（第3図）<sup>※5</sup>。対象としたのは、弥生中期の包含層IV～V層中の定形石器・不定形な石器 206点である<sup>※6</sup>。剥片については、大きさの分布から領域を作成し、トーンで示した。

剥片の大きさの領域については、西台畑遺跡よりも長町駅東遺跡の方が、やや小さいものの、共に5.0cm未満の比較的小型の剥片が多い。定形石器は、両遺跡共に剥片の領域内に収まり、5.0cm未満に分布する。長町駅東遺跡の定形石器としては、石鏃、折断調整石器が認められ、西台畑遺跡の定形石器としては、石鏃、尖頭器、石錐、ピエス・エスキューが認められる。不定形な石器は、両遺跡共に剥片の領域内にほぼ収まるものの、その分布域は分散している。

以上の検討により、両遺跡のIV層・V層から出土した定形石器は、剥片の分布範囲に収まり、その中で、長さ、幅共に5.0cm未満に収まることから、5.0cm未満の比較的小型の剥片を素材として製作されていたと考えられる。一方、不定形な石器については分布域が分散することから、その名称通り、剥片の大きさが定まっていない。さらに、素材となる剥片が折損、垂直割れ、潜在割れ、自然面を有していても利用されていることから、剥片の大きさや形状等にそれほどこだわらずに使用されていることが理解できる（第4図）。



第3図 石器長幅相関図



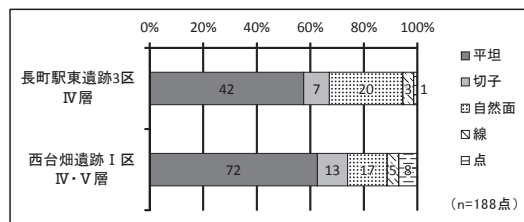
第4図 折損、垂直割れ、潜在割れ、自然面を有する剥片を素材とした不定形石器

## 2-2 剥片の特徴

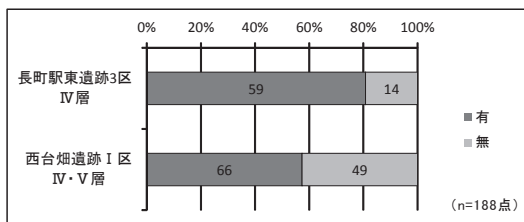
次に、完形剥片の打面形状と自然面の有無の検討を行った（第5図、第6図）。対象としたのは、弥生中期の包含層IV～V層中の完形剥片 188 点である<sup>\*7</sup>。

第5図は完形剥片の打面形状の比率を示したものである。打面形状については、長町駅東遺跡、西台畑遺跡共に平坦打面が過半数を占め、自然面打面、切子打面と続く。平坦打面を有する剥片の特徴としては、打面幅・厚が比較的広く、バルブ及び打面縁部のコーンが発達したものが多い。このような状態は、硬質石ハンマーによる剥離に見られるようである（大場 2007）。両遺跡では、流紋岩製の剥片によく見られ、剥離具に硬質石ハンマーが使用された可能性が高い。非流紋岩でも相当数見られるが、総数が流紋岩に比べ少ないことから、剥離具が硬質石ハンマーであると断定はできないが、流紋岩同様に硬質石ハンマーが使用されていたものと推測される。また、対象物は不明だが両遺跡からは石英安山岩製及び安山岩製の敲打痕を有する礫石器が出土している。石英安山岩、安山岩は付近の広瀬川及び名取川で採取することができることから、おそらく、石割りで使用された硬質石ハンマーについても付近の河床で採取されたものが用いられたと推測される。

第6図は完形剥片の自然面の有無を比率で示したものである。両遺跡共に自然面を有するものが過半数を占めていることから、自然面除去、打面及び作業面の作出など、剥片剥離作業の初期に剥離されたものが主体であったと考えられる。



第5図 剥片の打面形状



第6図 剥片の自然面の有無

## 3. 接合資料について

剥片剥離作業を示す有効なものとして接合資料が挙げられる。長町駅東遺跡と西台畑遺跡では、弥生中期の包含層IV～V層及び古代の遺構埋土中から出土した石器が接合し、149 個体の接合資料がある（折れ面接合を除く）。これらの接合資料は、剥片同士の接合資料と石核を含む接合資料に大別でき、それぞれ剥片剥離作業の特徴を見出すために検討を行った。

### 3-1 剥片同士の接合資料

ここでは、長町駅東遺跡と西台畑遺跡の剥片同士の接合資料 110 個体を対象とし検討を行った。

ここで対象とした剥片同士の接合資料とは、2点以上の剥片が接合している個体全てを指している。それぞれの剥片の剥離方向及び、接合する剥片の中で最初に剥離された剥片の背面構成から

以下のように分類した(第7図)。なお、背面構成については、一番新しい剥離痕のみを検討の対象とした。

第1分類

- I類：接合する剥片が同一の打面から連続的に剥離されたもの
- II類：接合する剥片が異なる打面から剥離されたもの

第2分類

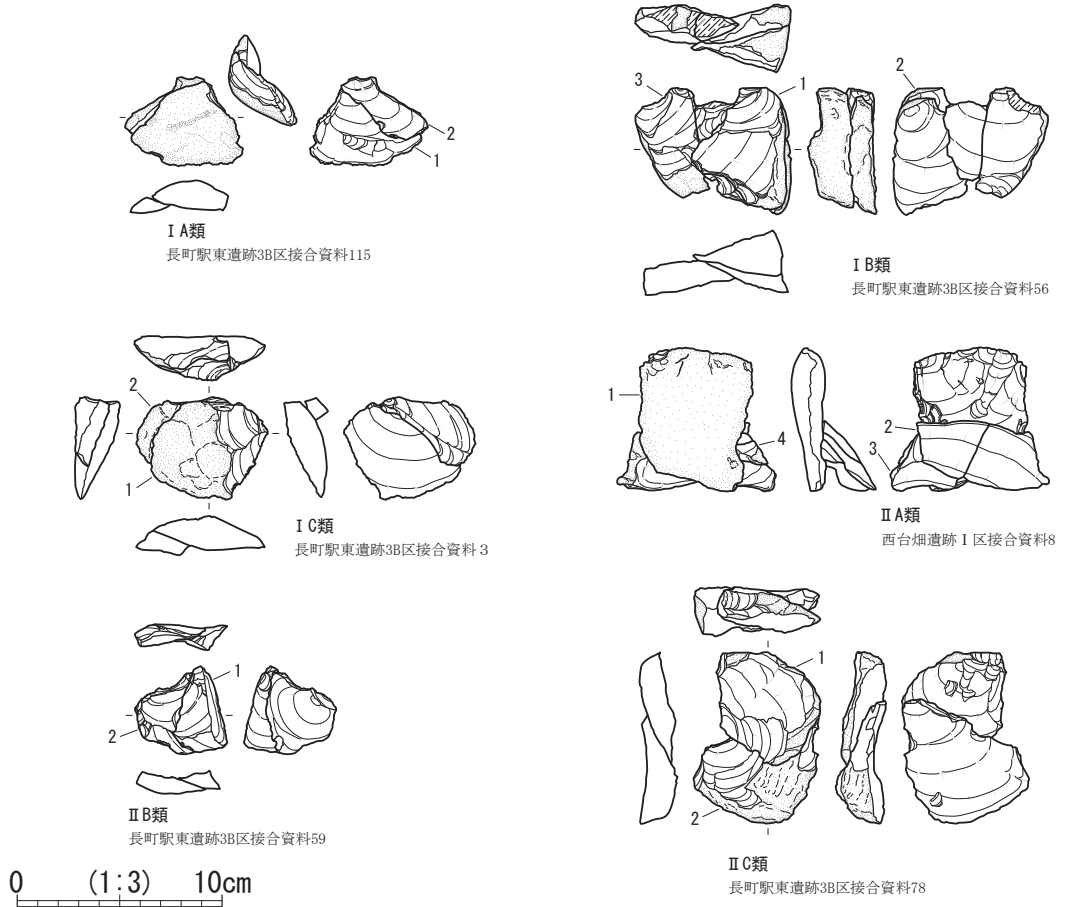
- A種：背面が自然面に覆われているもの
- B種：背面構成において先行する剥離が同一の打面から剥離されているもの
- C種：背面構成において先行する剥離が異なる打面から剥離されているもの

第1分類と第2分類の組み合わせから以下の剥片剥離作業が想定される。

- I A類：自然面除去、或いは作業面設定を行った後に先行する剥片と同一の打面から剥離されたもの
- I B類：3回以上、同一の打面から剥片が剥離されたもの
- I C類：打面転移後、2回以上、同一の打面から剥片が剥離されたもの
- II A類：自然面除去、或いは打面設定を行った後に打面転移が行われ、先行する剥片と異なる打面から剥離されたもの
- II B類：2回以上、同一の打面から剥片が剥離された後に打面転移が行われ、先行する剥片と異なる打面から剥離されたもの
- II C類：打面転移を繰り返しながら剥片が剥離されたもの

遺跡	地区	I A		I B		I C		II A		II B		II C		合計
		流紋岩	非流紋岩	流紋岩	非流紋岩	流紋岩	非流紋岩	流紋岩	非流紋岩	流紋岩	非流紋岩	流紋岩	非流紋岩	
長町駅東	2B	0	0	11	1	2	1	0	0	2	1	4	0	22
	3A	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	3B	4	1	26	2	8	0	2	0	10	3	7	0	63
	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		5		42		11		2		16		11		87
西台畑	I	1	1	1	1	0	0	2	0	6	1	0	0	13
	II	1	0	3	0	1	0	0	0	5	0	0	0	10
合計		3		5		1		2		12		0		23

第2表 剥片同士の接合資料分類



第7図 剥片同士の接合資料分類図

各分類の集計は第2表に示した。長町駅東遺跡では、I B類が半数を占めている。とはいえ、終始打面を固定し、同一方向からの加撃による連続的な剥片剥離を行うものが多かったとは考え難い。むしろ、各分類が剥片剥離作業開始から終了までの間に複合して行われることは十分考えられる。同一母岩でないため断定はできないが、集計結果にある各分類の組み合わせから、自然面除去、或いは打面・作業面設定を行った後、打面を固定し複数の剥片を剥離し、同一打面での剥片剥離に行き詰ったら、打面転移を行い再び打面を固定して複数の剥片を剥離するといった作業が繰り返されていたと推測される。総数が少ないが、西台畑遺跡についてもII C類を除く各分類が認められ、I B・I C・II B類といった同一打面から連続的に剥片剥離を行うようなものが相当数認められることから、長町駅東遺跡と同様の剥片剥離作業が行われていた可能性が考えられる。

石材は、両遺跡共に流紋岩が多い。また、流紋岩の接合資料には、同時割れ、垂直割れ、潜在割れが比較的多く認められた。

### 3-2 石核を含む接合資料

次に、長町駅東遺跡と西台畑遺跡の石核を含む接合資料 39 個体を対象とし検討を行った。

石核を含む接合資料の検討では、石核の素材形状や大きさ、石核調整の有無などの諸属性を抽出し、剥片剥離作業の復元を試みた (第 8～11 図、第 3 表)。なお、長町駅東遺跡 2 B 区及び 4 区の接合資料については、報告書の記載通り「個別別資料」という用語を使用している。

長町駅東遺跡では、原石の大きさを推定することができる接合資料が 7 個体確認されている (第 8 図 -1・6～8・10・11、第 10 図 -31)。これらはすべて小型の礫を素材としており、その内、第 10 図 -31 では分割礫を素材とし、剥片剥離作業が行われているが、その他は礫の状態から剥片剥離作業が行われている。第 8 図 -1 は稜調整が行われた後、打面転移を行わず、同一の打面から剥片剥離作業が行われている。この他、打面転移が行われていない接合資料は 2 個体確認されている (第 8 図 -10・11)。第 8 図 -2～5・9・12、第 9 図 -13～20、第 10 図 -21～30・32・33 は剥片剥離作業が進行しているため、原石の大きさを推定することができない接合資料である。その内、第 8 図 -2・12、第 9 図 -14～17 は分割礫を素材とし、剥片剥離作業が行われているが、第 8 図 -4・5、第 9 図 -13・18～22、第 10 図 -28 は剥片を素材とし、剥片剥離作業が行われている。第 8 図 -3・9・12、第 10 図 -23・25～27・29 は礫の状態から剥片剥離作業が行われている。その内、第 10 図 -26 は、打面と作業面を交互に替えて剥片剥離作業が行われている。また、第 10 図 -30 は自然面が残存していないが、その他は、自然面が残存している。用いられている石材の殆どが流紋岩である。

西台畑遺跡では、原石の大きさを推定することができる接合資料が 3 個体確認されている (第 11 図 -34～36)。これらは全て小型の礫を素材としており、その内、第 11 図 -35 では分割礫を素材とし、剥片剥離作業が行われているが、その他は礫の状態から剥片剥離作業が行われている。第 11 図 -37・38・39 は剥片剥離作業が進行しているため、原石の大きさを推定することができない接合資料である。第 11 図 -37 は剥片を素材としており、もう一方の第 11 図 -38・39 は分割礫もしくは厚手の剥片が素材である。第 11 図 -38 は剥片剥離作業の途中で打面再生が行われている。西台畑遺跡の接合資料は、全て自然面が残存している。用いられている石材は、流紋岩、碧玉が各 2 点、珪質頁岩、黒色頁岩が各 1 点と多様である。

両遺跡に共通する剥片剥離技術は、石核素材が、小型の礫を用いる場合は、そのまま剥片剥離作業が行われ、少し大きい礫の場合は分割するか、あるいは厚手の剥片を獲得後に剥片剥離作業が行われている。剥片剥離作業は同一打面から剥片を複数剥離し、剥離に行き詰ると (石核側の打面角が目的とする角度でなくなる) と打面転移を行い、再び剥片剥離を行うことが繰り返されている。剥離された剥片は、石核素材が拳大程度の大きさであるという制約から、比較的小型のものが中心であったと言える。それは、残された剥離面の観察からも明らかである。

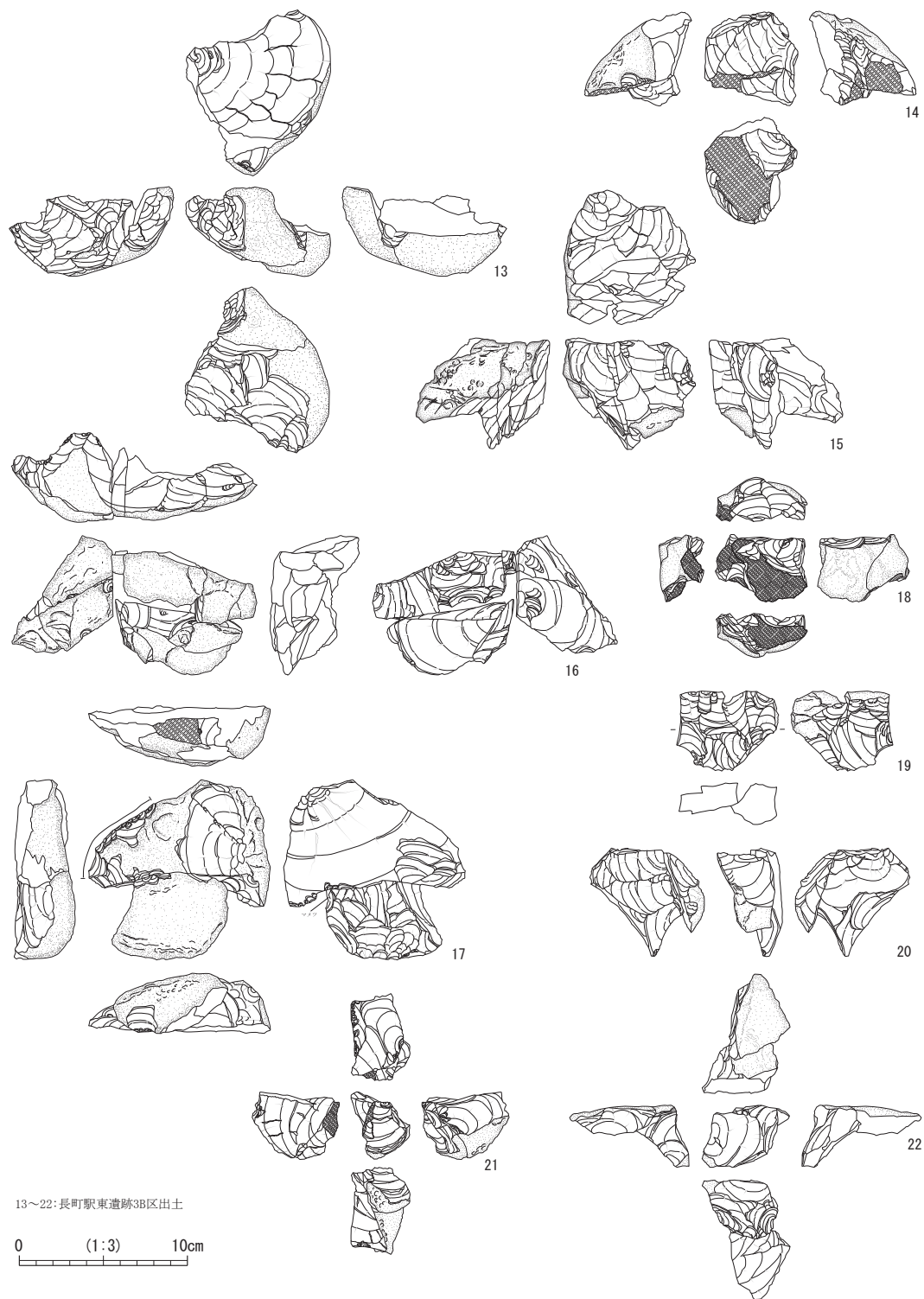
一方、両遺跡の剥片剥離技術の相違点としては、長町駅東遺跡では、第 10 図 -30 のように剥片剥離が進行し、自然面が全く残存しないものがあるが、西台畑遺跡では、全ての接合資料に自



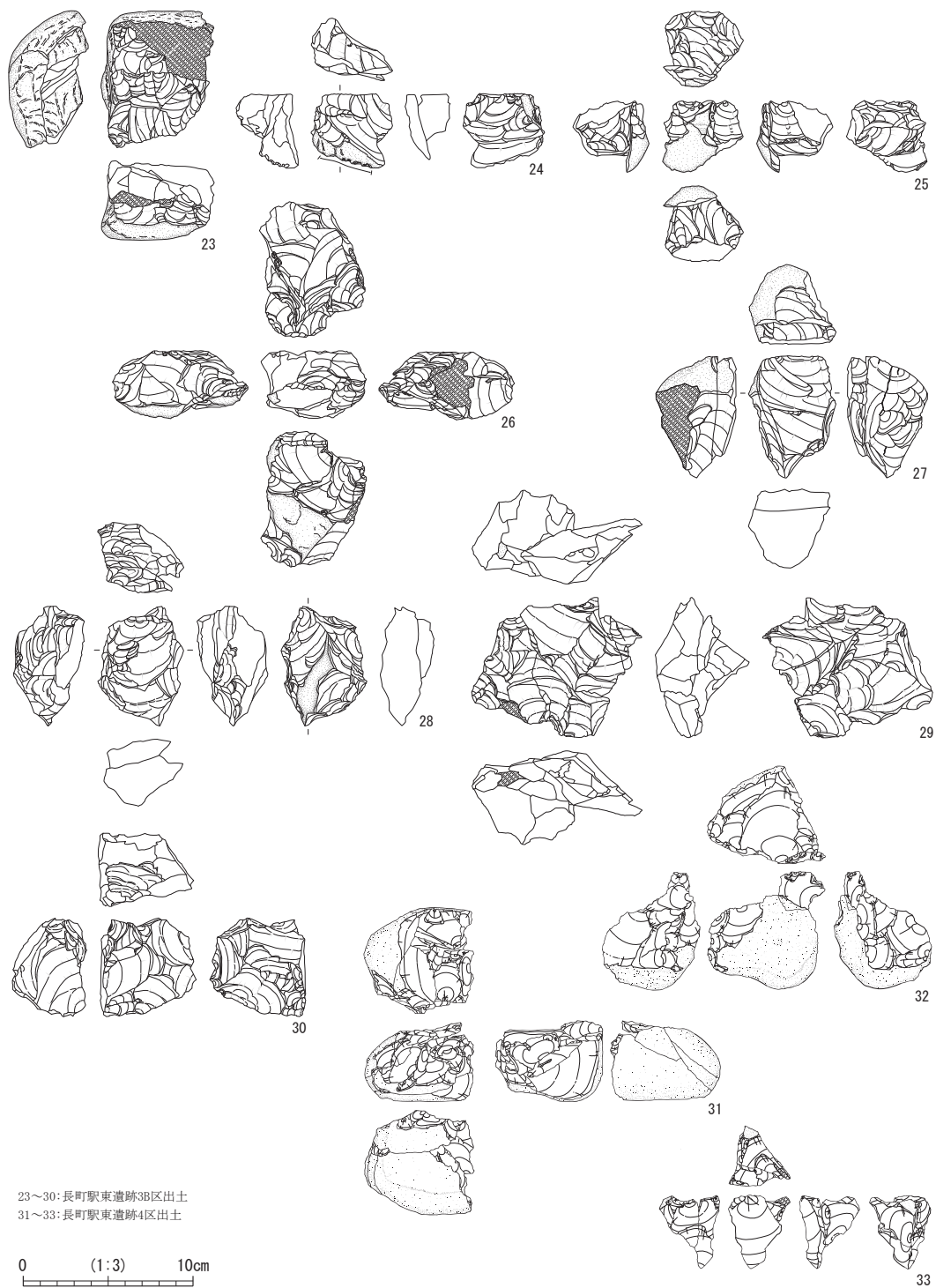
然面が残存していることから、西台畑遺跡の原石の方が長町駅東遺跡より小さかった可能性がある。その他、長町駅東遺跡の接合資料には第8図-1のように、稜調整が行われた後、固定された打面からのみ剥片剥離作業が行われ、縦長剥片が剥離されているものや、第10図-26のように、打面と作業面を交互に替えて剥片剥離作業が行われているものが認められ、西台畑遺跡では、第11図-30のように、打面再生が行われているものが認められるが、これらの少数例は意図的なものではなく偶発的なものの可能性が考えられる。また、稜調整や打面再生等の石核調整については、剥片剥離と打面転移が繰り返し行われる中で、結果として石核調整としての効果を発揮した可能性も考えられる。



第8図 接合資料（1）



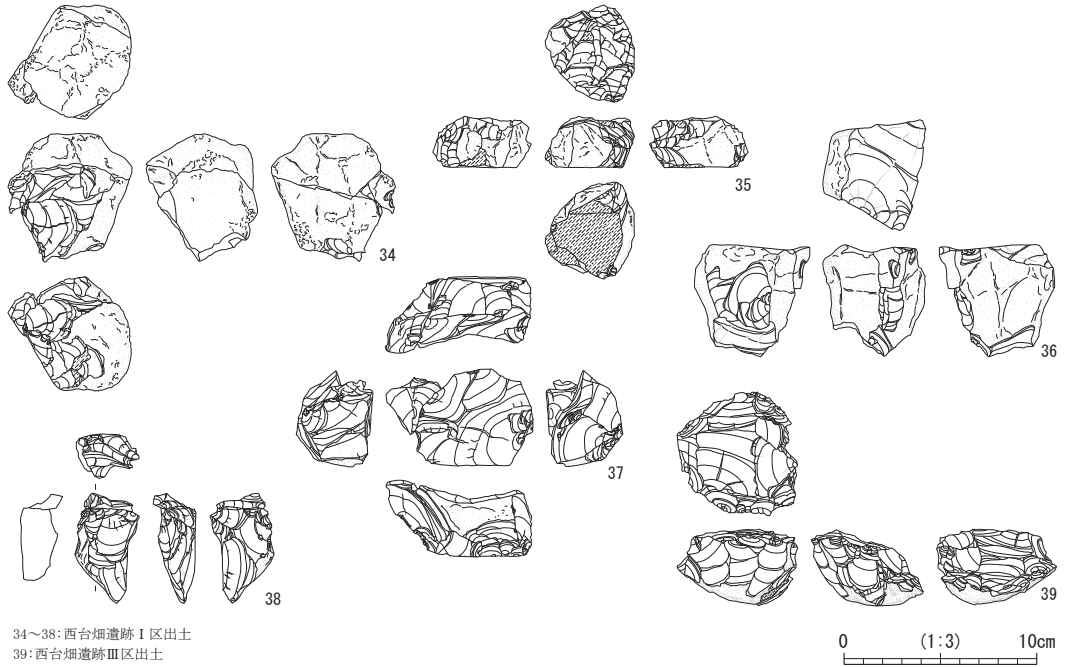
第9図 接合資料(2)



23～30:長町駅東遺跡3B区出土  
31～33:長町駅東遺跡4区出土

0 (1:3) 10cm

第10図 接合資料（3）



34~38: 西台畑遺跡Ⅰ区出土  
39: 西台畑遺跡Ⅲ区出土

第11図 接合資料(4)

接合資料の石材については、長町駅東遺跡では流紋岩が殆どを占めているが、西台畑遺跡では、流紋岩の他、碧玉、珪質頁岩、黒色頁岩等が見られる。しかし、西台畑遺跡では個体総数が少ないため、現段階で特徴として捉えるには難がある。

図版 番号	遺跡名	報告書掲載 登録番号	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石核 素材	稜調整	打面 調整	打面 転移	自然面	出土地・層位	接合状態
1	長町 駅東 遺跡	2B区 個別別資料 2	珪質 頁岩	6.2	6.2	7.5	63.57	礫	有	無	無	有	IV a 層	剥片 2 点 + 石核 1 点
2		2B区 個別別資料 6	流紋岩	6.7	8.9	3.1	117.22	分割礫	無	無	有	有	SI11・2 層 + SI19・堆積土 + IV 層 + IV a 層	剥片 6 点 + 石核 1 点
3		2B区 個別別資料 30	流紋岩	2.6	4.1	3.4	26.90	礫	無	無	有	有	SI14・堆積土	剥片 1 点 + 石核 1 点
4		2B区 個別別資料 10	流紋岩	3.1	7.6	3.3	52.53	剥片	無	無	有	有	IV 層 + IV a 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
5		2B区 個別別資料 27	流紋岩	6.9	2.8	2.8	40.60	剥片	無	無	有	有	IV 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
6		3B区 接合資料 11	流紋岩	4.6	6.0	3.1	75.00	礫	無	無	有	有	遺構検出面	剥片 1 点 + 石核 1 点
7		3B区 接合資料 10	流紋岩	6.5	6.1	5.8	183.42	礫	無	無	有	有	SI26・堆積土 + SI27・堆積土 + 遺構検出面 + IV 層	二次加工のある 剥片 2 点 + 剥片 5 点 + 石核 1 点
8		3B区 接合資料 43	流紋岩	2.3	4.7	5.1	49.05	礫	無	無	有	有	SM162・堆積土 + SD66・堆積土	剥片 1 点 + 石核 1 点
9		3B区 接合資料 22	流紋岩	5.2	3.6	3.7	64.46	礫	無	無	有	有	IV 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
10		3B区 接合資料 74	流紋岩	2.9	9.1	6.0	197.81	礫	無	無	無	有	IV 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
11		3B区 接合資料 119	流紋岩	3.7	5.0	4.3	59.41	礫	無	無	無	有	SI98・堆積土 + IV 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
12		3B区 接合資料 95	流紋岩	8.5	9.9	5.8	333.50	分割礫	無	無	有	有	遺構検出面 + IV 層	剥片 2 点 + 石核 1 点
13		3B区 接合資料 108	流紋岩	4.6	7.3	8.9	216.26	剥片	無	無	有	有	SI26・堆積土 + SI13・堆積土 + 遺構検出面	剥片 2 点 + 石核 1 点
14		3B区 接合資料 8	流紋岩	5.4	6.1	5.2	133.34	分割礫	無	無	有	有	SI27・堆積土 + IV 層	剥片 1 点 + 石核 1 点
15		3B区 接合資料 47	流紋岩	6.5	7.7	7.4	265.41	分割礫	無	無	有	有	SI99・堆積土 + SI113・堆積土 + Pit735・堆積土 + 遺構検出面	微細剥離痕の ある剥片 4 点 + 剥片 2 点 + 石核 1 点
16		3B区 接合資料 23	流紋岩	6.9	13.6	4.9	222.07	分割礫	無	無	有	有	SI99・堆積土 + SI113・堆積土 + SI115・堆積土 + SI127・堆積土 + 遺構検出面 + IV 層	微細剥離痕の ある剥片 3 点 + 剥片 5 点 + 石核 1 点
17		3B区 接合資料 41	流紋岩	10.7	10.6	3.5	353.21	分割礫	無	無	有	有	SI88・堆積土 + IV 層	二次加工の剥片 1 点 + 石核 1 点
18		3B区 接合資料 121	珪質 頁岩	3.6	2.5	5.3	41.11	剥片	無	無	有	有	SX2・堆積土 + IV 層	剥片 2 点 + 石核 1 点
19		3B区 接合資料 126	珪質 頁岩	5.5	5.8	2.9	64.97	剥片	無	無	有	有	SI127・堆積土 + IV 層	石核 2 点
20		3B区 接合資料 63	流紋岩	3.8	6.7	4.5	81.00	剥片	無	無	有	有	SA1・堆積土 + 遺構検出面	二次加工のある 剥片 1 点 + 石核 1 点
21		3B区 接合資料 111	流紋岩	3.6	2.8	5.0	42.03	剥片	無	無	有	有	遺構検出面	微細剥離痕の ある剥片 1 点 + 石核 1 点

第 3 表 石核を含む接合資料観察表（1）

図版 番号	遺跡名	報告書掲載 登録番号	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石核 素材	稜調整	打面 調整	打面 転移	自然面	出土地・層位	接合状態
22	長町 駅東遺跡	3B区 接合資料 118	流紋岩	3.4	4.4	6.2	50.33	剥片	無	無	有	有	SD42・堆積土 + 遺構検出面	剥片1点 + 石核1点
23		3B区 接合資料 71	流紋岩	6.4	7.8	4.6	219.92	礫	無	無	有	有	SI102・堆積土 + SI113・堆積土 + SI127・堆積土 + 遺構検出面	微細剥離痕の ある剥片2点 + 剥片4点 + 石核1点
24		3B区 接合資料 92	流紋岩	4.3	4.6	3.3	41.96	不明	無	無	有	有	SI95・堆積土 + 遺構検出面	微細剥離痕の ある剥片1点 + 石核1点
25		3B区 接合資料 86	流紋岩	4.1	4.4	4.2	63.72	礫	無	無	有	有	SI115A・堆積土 + 遺構検出面	剥片1点 + 石核1点
26		3B区 接合資料 94	流紋岩	7.9	5.8	4.0	168.53	礫	無	無	有	有	Pit625・堆積土 + 遺構検出面 + IV層	微細剥離痕の ある剥片1点 + 剥片2点 + 石核1点
27		3B区 接合資料 112	流紋岩	7.2	4.9	4.6	139.52	礫	無	無	有	有	IV層	二次加工のある 剥片1点 + 石核1点
28		3B区 接合資料 83	流紋岩	7.0	4.8	3.9	101.50	剥片	無	無	有	有	SI99・堆積土 +SI115B・堆積土	剥片1点 + 石核1点
29		3B区 接合資料 82	流紋岩	8.1	8.7	5.5	199.33	礫	無	無	有	有	SI104・堆積土 +SI107・堆積土 + 遺構検出面 + 出 土地・層位不明	石錐1点 + 二次 加工の剥片1点 + 石核2点
30		3B区 接合資料 12	流紋岩	5.6	5.6	4.3	130.85	不明	無	無	有	無	SD42・堆積土 +SI113・堆積土	二次加工のある 剥片1点 + 石核1点
31		4A- B区 個別資料 1	流紋岩	5.5	6.5	6.3	167.80	分割	無	無	有	有	V層	二次加工のある 剥片1点 + 微細 剥離痕のある 剥片1点 + 剥片 5点 + 石核1点
32	4C区 個別資料 3	流紋岩	7.0	6.9	5.3	173.00	礫	無	無	有	有	V層	剥片1点 + 石核1点	
33	4A- B区 個別資料 2	流紋岩	4.4	3.6	3.5	28.80	不明	無	無	有	有	V層	剥片1点 + 石核1点	
34	西台畑 遺跡	I区 接合資料 1	碧玉	6.6	6.5	6.0	221.18	分割礫	無	無	有	有	IV層 + IV d層	剥片3点 + 石核1点
35		I区 接合資料 2	碧玉	2.2	4.6	5.2	66.37	分割礫	無	無	有	有	IV d層 + V層	剥片2点 + 石核1点
36		I区 接合資料 3	流紋岩	5.8	5.3	5.8	164.81	礫	無	無	有	有	IV層 + IV d層	剥片1点 + 石核1点
37		I区 接合資料 4	珪質 頁岩	5.0	7.6	3.9	83.50	剥片	無	無	有	有	IV層 + IV d層	微細剥離痕の ある剥片1点 + 石核1点
38		I区 接合資料 5	黒色 頁岩	3.2	2.5	5.5	31.87	分割礫 or 剥片	無	有	有	有	IV層 + IV d層	剥片1点 + 石核1点
39		Ⅲ区 接合資料 9	流紋岩	3.9	6.3	5.8	130.71	有	無	無	有	有	IV d層 + VI層	剥片1点 + 石核1点

第3表 石核を含む接合資料観察表(2)

#### 4. まとめ

以上、長町駅東遺跡と西台畑遺跡で出土した弥生中期の石器の石材の利用傾向、剥片及び接合資料を検討してきた。その結果は以下のようにまとめることができる。

両遺跡の剥片剥離技術の特徴は共通点が多い。石器石材は、両遺跡付近の名取川や広瀬川の河床で採取できる流紋岩が多用され、原石の状態で遺跡内に持ち込まれる。剥離具には、両遺跡付近の名取川や広瀬川で採取できる安山岩や石英安山岩などの硬質石ハンマーが用いられていたと推測される。石核素材に小型の礫が用いられる場合には、そのまま剥片剥離作業が行われる一方で、少し大きい礫の場合は分割するか、厚手の剥片を獲得した後に剥片剥離作業が行われる。まず、自然面除去、或いは打面・作業面設定を行った後、打面を固定し複数の剥片を剥離し、同一打面での剥片剥離に行き詰ると、打面転移を行い再び打面を固定して複数の剥片を剥離するといった作業が繰り返されている。この間、石核調整は殆ど行わない。剥離された剥片は、長さ、幅共に5.0cm未満の比較的小型のものが多い。それらの小型剥片を素材として、石鏃、尖頭器、石錐、ピエス・エスキュー等が製作されている。スクレイパー、二次加工のある剥片、微細剥離のある剥片は、素材剥片の大きさにそれほどこだわらず、素材剥片が折損、同時割れ、垂直割れ、自然面を有していても利用されていたことが確認できた。

#### おわりに

本稿では、長町駅東遺跡と西台畑遺跡の弥生中期の石器の検討から、郡山低地東側における流紋岩の剥片剥離技術については特徴を見出すことができた。一方で、非流紋岩の剥片剥離技術については、流紋岩の剥片剥離技術との共通点が確認できたものの、資料数の少なさから、素材をどのような形で遺跡内に持ち込み、どのように割ったのかを明らかにできなかったとは言い難い。また、非流紋岩に含まれるそれぞれの石材は、供給地の距離や石質の違いによって、剥片剥離技術に影響を与えることが十分考えられる。非流紋岩の剥片剥離技術については、今後の課題としたい。

なお、本稿を作成することができたのは、筆者が幸運にも長町駅東遺跡と西台畑遺跡の報告書作成に携われたことにある。報告書作成時に多くのことを教わった、仙台市教育委員会の工藤信一郎氏、荒井格氏、斎野裕彦氏に多大なる感謝を申し上げます。また、日頃よりご教示・ご協力頂いている、上野淳也先生、玉川剛司先生、沖野誠氏、沖野実氏には感謝の念に耐えない。

橘昌信先生の突然の訃報を知り、感慨は限りない。先生から卒業論文の指導で「モノは見たのか」とお叱りを受けたことを今でも鮮明に覚えている。先生から受けた御恩に報い得る程のものではないことは承知しているが、本稿は私が報告書作成に携わり「モノを見る」なかで着想を得て執筆したものである。謹んで本稿を捧げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

[註]

- ※1 長町駅東遺跡は中期中葉(杵形囲式期)、西台畑遺跡では中期前葉(寺下囲式並行期)から中期中葉(中在家南式期)の土器が出土している。
- ※2 古代の遺構は弥生中期の包含層を掘削して造られていることから、出土層位が遺構検出面とされているものについてもIV層出土として取り扱った。
- ※3 山形・宮城県境一帯で産出している珪質頁岩については、秦昭繁氏が研究されている(秦 2003)。詳しくはそちらを参照されたい。
- ※4 碧玉・玉髓は、宮床川、白石川、一迫川、七北田川で採取可能とされている(山田 1986)。
- ※5 第3図の長町駅東遺跡出土剥片の大きさの領域については、『長町駅東遺跡第3次調査』報告書に掲載されたものから作成した。西台畑遺跡出土剥片の大きさの領域については、『西台畑遺跡第1・2次調査』第7章第3節(2)第265図を元に作成した。
- ※6 石鎌、尖頭器、石錐、ピエス・エスキューユなど形の定まった石器を定形石器、スクレイパー、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片など形の定まっていない石器を不定形な石器として扱った。また、「不定形石器」(阿子島 1984)という用語は器種を示すことから、大別分類としての「定形石器」という用語に対して、「不定形な石器」という用語を使用した。
- ※7 第5・6図の長町駅東遺跡出土剥片の打面形状・自然面の有無については、『長町駅東遺跡第3次調査』報告書に掲載されたものから作成した。西台畑遺跡出土剥片の打面形状・自然面の有無については、『西台畑遺跡第1・2次調査』第7章第3節(2)第263・264図を元に作成した。

参考文献

- 阿子島香 1984 「不定形石器分析の視点」『文化』47-3・4 東北大学文学会
- 荒井格 2003 「東北地方出土石庖丁の製作工程と石材選択」『日本考古学』15 日本考古学協会
- 大場正善 2007 「日向洞窟遺跡西地区出土の頁岩製槍先形尖頭器における技術学的検討 - 東北地方における隆起線文土器段階の頁岩製槍先尖頭器製作の身ぶりからみえるもの」『古代文化』58- IV 古代学協会
- 斎野裕彦 2001 「石鎌の機能と用途(上)(下)」『古代文化』53-10・11 古代学協会
- 斎野裕彦 2002 「農具 - 石庖丁・石鎌・大型直縁刃石器」『考古資料大観第9巻 - 弥生・古墳時代石器・石製品・骨角器』小学館
- 須田富士子 2004 「宮城県の石器石材について」『宮城県考古学』第6号
- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他』仙台市文化財報告書第213集
- 仙台市教育委員会 2000 『高田B遺跡』仙台市文化財報告書第242集
- 仙台市教育委員会 2007 『長町駅東遺跡第4次調査』仙台市文化財報告書第315集
- 仙台市教育委員会 2008 『長町駅東遺跡第1・2次調査』仙台市文化財報告書第324集
- 仙台市教育委員会 2009 『長町駅東遺跡第3次調査』仙台市文化財報告書第340集
- 仙台市教育委員会 2010 『西台畑遺跡第1・2次調査』仙台市文化財報告書第359集
- 仙台市教育委員会 2011 『西台畑遺跡第3次調査』仙台市文化財報告書第388集
- 秦昭繁 2003 「東北地方の珪質頁岩石材環境」『考古学ジャーナル』499
- 山田富士子 1986 「青葉山遺跡の石材」東北大学埋蔵文化財調査年報2